

## 図書館の徹底活用術②

学習支援に於ける対話と図書館サービスの質を可視化する試みに関する考察  
：内面への着眼に基づく「暗黙知」と「経験知」を巡って

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に、図書館サービスの有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介しています。今回は、公教育に於ける学力論を巡って梶田勲一が提唱した「氷山の一角モデル」に着眼しました。そこでは、学力観を水に浮かんでいる氷山に喩え、水面の上に出ている部分を「見える学力」（例えば、「知識・理解」「技能」とし、水面下の隠れた部分を「見えにくい学力」（「例えば、思考力・判断力・表現力」「関心・意欲・態度」）として学力の在り方を提唱しています。

この水面に浮かぶ氷山の喩えによって、僅かに水面に「見える学力」を「見えにくい学力」が、その水面下で膨大な質量として支えているということが強調されています。このことは、「知識・理解」や「技能」といった客観的に可視化して測定できる部分の学力と、「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力・表現力」といった単純には測定不可能な内面的な要素を含む学力観を念頭にしていることを示唆しています。

このような一連の見方を下敷きにして図書館でのサービスを念頭に置くと、利用者である学習者の目に見えている、換言すると、可視化されているサービスの部分と可視化されていないが、見えているサービスの質を水面下で支えている部分があると云うことができます。そこを意識化する為に、今まで幾度かに渡り「対話」に着眼してきました。例えば、『GAIDAI BIBLIOTHECA 185号』では、ドナルド・ショーン (Donald A. Schön)が提唱する「行為の中の省察」の観点から学習支援に於ける「対話」の重要性について言及してきました。また、続く『GAIDAI BIBLIOTHECA 186号』では、「対話」を学習経験として位置づけて、その経験を生成する「行為の中の省察」を支援する図書館サービスの在り方に着眼しました。

この「対話」を巡っては、同様に『GAIDAI BIBLIOTHECA 189号』でブルーナー (Bruner)の著書である『可能世界の心理』に着眼して「論

理実証モード」と「ストーリーモード」を下敷きにして内面行為としての省察に焦点を当てました。このことは、バフチン (Mikhail Bakhtin)の云う「対話」を通した学びへの経験への着眼（『GAIDAI BIBLIOTHECA 190号』を参照されたい）であり、ペスタロッチ (Pestalozzi)が云う生活の中の経験を通した学びへの着眼（『GAIDAI BIBLIOTHECA 191号』を参照されたい）でもあると云うことができます。

これらのスタンスに共通していえることは、経験からの学びへの着眼であり、その経験は日常生活の中に存在する活動、謂わば、学びへの実践活動と云う可視化できない内面にアプローチしようとする試みであることと云うことができます。このことは、マイケル・ポランニー (Michael Polanyi)『暗黙知の次元』（『GAIDAI BIBLIOTHECA 187号』を参照されたい）で言及されたことを内包しています。

Polanyiが云う「暗黙知」に類似した知の側面を捉えた概念として、ドロシー・レナード (Dorothy A. Leonard)はその著書『「経験知」を伝える技術：ディーブスマートの本質』に於いて、職業も含んだ生活経験で展開される実践活動から生成する「経験知」に着眼しています。これは「暗黙知」と同様に、可視化された「形式知」と対照されることで浮かび上がる知の在り方として措定されています。そしてこの「経験知」が他者へ伝承されるプロセスに関して言及しているのですが、その際に重要になるのが、ディーブスマート (Deep Smarts)として人間の内面に根ざした匠の技のようにミメシスとして身体化され会得された知の在り方に焦点を当てていることです。

そこで今回はこのDeep Smartsに関して深化されると共に図書館サービスとの関連に言及していきたいと思えます。

えだもと ますひろ (准教授・図書館学・教育学)